採用と教育研究所
saiyoutokyouiku kenkyujo
仕事の合間に「ほっ」と一息。働く人の癒しマガジン　【癒え～る】

YELL

vol.11

特集 青い窓 ～前編～

嘉永５年（１８５２年）の創業以来、今も変わらず福島県民に愛され続けている薄皮饅頭でおなじみの老舗菓子店「柏屋」。その「柏屋」の一角に変わったウィンドーがあります。そのウィンドーは「青い窓」と呼ばれ、毎月一遍、子どもたちのさわやかな詩が飾られています。

青い窓は、日常の中にある「楽しいこと」「悲しいこと」「驚いたこと」など純粋な気持ちをつづった子どもたちの詩を公募しています。寄せられた詩は、年６回に渡る児童詩集「こどもの夢の青い窓」へ掲載（奇数月発行）や、ラジオ番組放送での詩の朗読、書籍などを通じて生き生きとした子どもたちの感性を福島県郡山市から届けています。

青い窓は昭和３３年（１９５８年）５月、福島県郡山の地に誕生しました。

当時、郡山市は急速な近代化で子どもの遊び場が失われていく時代でした。地元に育ち、一緒に遊んだ幼なじみの仲間たち４人は、「自分たちが子どものころは遊び場や人と人との温かい繋がりがあった。しかし、今の子どもたちが大人になった時、豊かな子ども時代を送ったと振り返ることはできるのだろうか。果たして、郡山は子どもたちが夢を描ける街だろうか…。」近代化により思い出の場所や自然の姿が消えていくことを残念に思っていました。

そこで、「子どもたちが自由にのびのびと夢を描ける場所を作りたい」「子どもたちの素直で自由な心から生まれた詩を募集しよう」と提案をしたのは詩人の佐藤浩さん。その一言から「それならお店のショーウィンドーに詩を飾ろう」とお饅頭屋の本名洋一さん。絵描きの橋本貢さんが詩を絵にし、看板屋の篠崎賢一さんがウィンドーのディスプレイを担当。４人の得意なことを生かし、昭和３３年５月１日、柏屋のウィンドーに詩を飾る「青い窓」が始まりました。

ではなぜ、詩を飾ったのでしょうか。その背景には、青い窓の主宰で詩の展示を提案した佐藤浩さん（以下、浩さん）の体験がありました。

戦時中、学校教師をしていた浩さん。当時受けもっていた女子児童が、戦争に行くお父さんとその後ろ姿を切なく見つめるお母さんを悲しく思い、「戦争は嫌だ。平和であってほしい」と願う素直な心を詩にあらわしました。浩さんは彼女の詩に心を動かされました。

しかし、当時は戦争を否定できず、平和を願うことすら許されない時代。彼女の詩を肯定し受け止めてあげることも、彼女の心を守ってあげることもできなかった後悔の念が、浩さんの胸の内に残っていたのです。

―誰よりも、言葉の重み、深さを子どもの心から学んでいた浩さん。

浩さんの過去の戦争体験から、「これからは子どもたちの純粋で素直な心を大切にしていきたい。詩を通じて、夢を描いたり、想いを表現していってほしい」「大人は、子どもたちの詩を通じて子どもに学んでほしい」という願いが青い窓には込められています。

▲初代館長 佐藤浩さんの残したことば

■詩をかく

「詩をかくことは自分の心と向き合い、丁寧に生きることの大切さ、豊かな感受性を育ててくれます」と青い窓同人代表の橋本陽子さん（以下、陽子さん）は言います。

自分の心を表現するときは、心をよく見つめ、よく考えるようになり、想像力や思いやりの気持ちが芽生えます。そして、失敗や経験に学び、多様性を認め合うことで、丁寧に生きることにつながっていくのだそうです。

青い窓を始めるとき、そもそも子どもが詩をかけるわけがない、という周囲の意見もあったそうです。しかし「詩に触れる機会が少ないだけで、詩の楽しさを知ることができたら、子どもたちもつづることができるようになる」と当時の浩さんが言いました。

そして「青い窓」創刊から１年後、福島県内の小中学校へ詩集を無料で配布。詩をかく取り組みに共感した先生方から子どもたちの詩が寄せられるようになり、現在は福島県内の小中学校のほか、全国の会員へ、創刊以来休むことなく詩集を届けています。

青い窓が募集している詩は児童詩（小学生～中学生のかいた詩）と口頭詩（幼児の話す言葉を大人が聴いて、かき取ったもの）の２通りで題材は自由です。投稿された詩に大人が添削を行うことはありません。心で感じている自由なそのままの気持ちを大切にしています。それが子どもたちが詩の楽しさを知ることであり、丁寧に生きる大切さや豊かな心を学び、育んでいるのです。

児童詩集「こどもの夢の青い窓」に掲載する詩の選出は青い窓の会事務局で行われますが、詩をかいた子どもたちの背景や置かれている環境などは全くわかりません。

ある時、陽子さんが、選ばれた詩を詩集に掲載するため作者の担当の先生とご連絡を取った際、「実は特別学級の児童がかいたんです。」と先生から聞き、とても驚かれたというお話を伺いました。

このような出来事から陽子さんは「子どもの詩には技術ではなく、伝えようとする力や感じた想いの深さが表れる」ということを感じられたのだそうです。

ここで、青い窓の詩を１つご紹介させて頂きます。

■「ポケット」　　詩：栗辻 安子さん

東京都町田市町田第三小学校3年生（昭和45年）

お母さんの　エプロンの
ポケットの中を見ると
ボタンや　はんけち　小さなえんぴつ
ちり紙や　ひもも　はいっている
ほかにも　まだはいっている
ポケットに手を入れて
いそがしそうに　はたらいている
くしゃみをすると　すぐちり紙を
出してくれる
妹のかおがきたないと
ハンケチを出して　かおをふく
おかあさんだけのポケットではない
みんなのポケットさ

栗辻安子さんの作品「ポケット」は、株式会社柏屋の理念になっています。

「おかあさんのポケットは家族みんなのもの　柏屋のポケットは社会みんなのもの　お店も朝茶会※1も　青い窓も　そして萬寿神社※2も・・・。」企業は社会のために何ができるのか、会社の在り方が当時小学3年生の詩の中に隠されていました。（YELL 次号 後編へ続く）

<青い窓の会事務局>
〒963-8024　福島県郡山市朝日 1-13-5　開成柏屋内
TEL：024-925-6451　FAX：024-933-1837
E-mail　info@aoimado.jp
HP：http://www.aoimado.jp

※1 朝茶会…毎月1日（元旦をのぞく）柏屋本店で開催。老若男女が自由に集い作りたての薄皮饅頭と一緒に会話を楽しむことのできる憩いの場を提供しています。

※2　萬寿神社（まんじゅうじんじゃ）…饅頭（まんじゅう）にも通じることから命名されたもので、萬（よろず）の寿（ことぶき）の意味を持ち、縁結びの神様として親しまれている神社。開成柏屋にてご祈願することができます。

母の誕生日

採用と教育研究所のバースディ休暇は、「お母さんの誕生日」です。

４月、私は母の誕生日を祝うため実家のある山形へ向かいました。いったい何と声をかけ、何を買ったらいいものか。なかなか浮かんできません。結局、母が好きな花を花屋さんで購入。「プレゼント用に」とお願いすると、「お相手の方はどんな方？」と。お相手…。「実は母の誕生日で」となんだか声が小さくなります。花屋さんは驚き、笑顔に。

実家に帰り、母にアレンジメントを手渡すと、きょとんとした顔で、どうしたの？と聞く母。「お誕生日おめでとうございます。」と、少し他人行儀な言い方でしたが、誕生日のお祝いの言葉をかけると、驚きながらも嬉しそうな表情で、「ありがとうございます。」

家族に感謝する。『当たり前』のことのようですが、そんな当たり前のことが普段どれだけ出来ていないのか。また、その時間のために休みを作ってくださった会社の仲間達に感謝する一日となりました。顔を合わせて言えなかった、「産んでくれてありがとう、命をくださりありがとう。」次の機会に挑戦です。（清野）

採用と教育“健康食”ブーム到来！？

宮城県仙台市の六丁目農園にランチと見学に行ってきました。六丁目農園は、近所の農家さんの野菜を中心に体にやさしい素材だけを使った自然派ビュッフェレストランです。とってもお洒落な内装と明るい店内。平日のお昼でしたが、女性を中心に沢山の人で賑わっていました。

このレストラン、なんと調理、配膳まで、精神や発達、身体、知的障がいなどさまざまなハンディキャップを持っている方々で運営されています。料理長もまた障がいを持っていますが、その舌で味を覚え、レシピを書きだして料理を提供します。また、料理場で働くスタッフの配置も、料理長の役割。２０名以上のスタッフ一人ひとりの障がい特性を考え、それぞれの得意分野でお志事をされています。そこだけ聞くと、福祉に興味がある人たちで賑わっているのでは？と思いがちですが、全くそんなことはありません。体にやさしくて美味しい料理。障がいの無い方からも「同情」ではなく、「憧れ」となるシェフの皆さん、働く皆さん、お洒落で素敵な空間がありました。

六丁目農園を見習って採用と教育では最近、健康食のブームがきています。お昼休憩には、「玄米おにぎり」を、社長が社員の皆に用意してくれています。玄米は、白米に比べて栄養分が圧倒的に多く、さらにバランスよく含まれています。また、食物繊維が豊富で、体を綺麗にしてくれる効果もあるようです。また、通常のご飯よりも固めのため噛む回数も増えます。通常のお米では３０回ほど噛めば良いといいますが、玄米では１００回噛むと良いそう。そんなに噛めてしまうのです。栄養素だけでなく、噛むことでも健康になります。

日々の志事は体が資本！体のためにはまずは食から！あなたも食べ物に気をつけた生活をおくってみませんか？

ほっとコラム

福島県で学校の先生限定の中村文昭氏ディナー笑（ショー）を開催させて頂きました。Ｓさんのご自宅を会場に、食事＆宿泊付の特別セミナーです。限定20名で中村文昭さんを独占。文昭さんに質問したいことを時間が許す限り聴いて、笑って、食べて朝まで大興奮の眠れない夜になりました。

今回のセミナー、実は、会場を提供してくださったＳさんの夢が実現した瞬間だったのです。

農業高校で教員をされていたＳさんが定年退職される前に「退職金はだれのものか。わかるかい？半田君。」と私に質問されました。

退職金は、退職した本人のものだと考えていた私は、度胆を抜かれました。

「この地区で生まれ育って、先生にさせてもらった。このお金は、地域の方からいただいたお金なんだよ。だから、退職したら農業で地域お越しを、そして若い先生へ恩送りをしたい。」とおっしゃったのです。

若い先生へ恩送りをする。即ち、心のスイッチを入れること。

Ｓさんの考えたスイッチの入れ方は、中村文昭さんのような講師を福島に招いて、一人でも多くの先生に話を聴いてもらうこと。そんな想いの詰まった時間でした。

セミナーの中で、文昭さんおすすめの映画を教えていただきました。台湾映画『KANO』。セミナーに参加された一人の先生は、さっそく野球部の３年生全員を連れて映画館へ向かわれました。

福島には、志と行動力があるすばらしい先生が多くいらっしゃいます。

～Ｓさん　出演・書籍紹介～

■中村文昭氏　ポットキャスト
みるみる元気がわいてくる
「第40回　ガハハなゲスト!?Ｓさん」
http://www.kurofunet.com/nakamura/podcast

Sさんの先生応援セミナーは、不定期で開催予定です。

■人物のまち福島
～社会人として大切なことは植物から学んだ～
SK文庫　採用と教育研究所発行
▼紹介映像
https://youtu.be/Pacq7sASH5E

KANO　～1931 海の向こうの甲子園～
（2014年公開）
脚本　陳嘉蔚、魏徳聖、馬志翔
出演　永瀬正敏/大沢たかお/坂井真紀
配給　威視電影 / ショウゲート

半田 真仁（はんだ しんじ）
「採用と教育研究所」 所長
企業、自治体等の採用と教育を手がける。福島の企業を中心に、いい会社を目的に「仁財育成」のサポーターとして定評がある。
笑いが溢れ楽しく役立つ講演は経営者から学生まで幅広く人気で全国を駆け回る。

YELL 11号　発行/ 採用と教育研究所
〒960-8055 福島県福島市野田町6-7-8 B103
TEL 024-529-5153　　FAX 024-529-5794
E-mail:info@saiyoutokyouiku.com
http://www.saiyoutokyouiku.com